

メトロマニラ貧困地域における住居及び居住形態に関する研究

— 国際援助活動における建築人類学の応用 —

主査 牧野 冬生*¹

委員 ユルック ヘルブリング*², 菊地 靖*³

本研究は、メトロマニラ貧困地域4地区を対象としてフィールドワークを行い、住居及び居住形態の実態調査を通して、社会構造の変容を捉えることにある。調査結果から、居住者の構成、狭小な生活空間への対応、帰属意識の変容などを読み取り、住民同士あるいは住民とコミュニティの新たな関係性を生み出す空間特性を把握した。親族関係については、拡大家族や儀礼親族の重要性はまだまだ認められる。その一方で核家族を中心とした家族構成を基本としながらも、生活機能をコミュニティに依存せざるを得ない生活実態から、フィリピン都市型ともいえるべき新しい社会構造の萌芽的現象を読み取ることができる。

キーワード : 1) メトロマニラ, 2) 住居, 3) 居住形態, 4) 貧困地域, 5) 拡大家族, 6) 儀礼親族,
7) コミュニティ融資事業, 8) 建築人類学, 9) 国際援助協力

A STUDY ON THE HOUSE AND THE LIVING STYLE OF THE DEPRESSED AREA IN METROMANILA

— A Possibility of Architectural Anthropology for International Cooperation —

Ch. Fuyuki Makino

Mem. Jürg Helbling, Yasushi Kikuchi

This study examined a transformation of the social structure through the in-depth research and interviews on houses and living styles in the four depressed areas of Metro Manila. Particular attention is devoted to the characteristics of the ways in which the limited living spaces are utilized and the residents' sense of belonging. As a result, new relationships between the residents and the community were found out. At the same time, traditional relationships of expanded families and kinship systems have been strengthened in new forms. I argue that there can be observed a new social structure described as Philippine Urban Style.

1. 研究の背景

発展途上国への援助協力において、地域固有の文化を尊重し開発を推進することは、援助側、被援助側双方にとって十分に考慮しなければならない問題である。実践面においては、さまざま困難があるにしろ、人類学者は受益住民のニーズを捉えプロジェクトを円滑に実行するために、援助機関と受益住民の間を繋ぐ仲介人としての役割を果たそうとしてきた。しかし、実際には「参加型開発」を看板にした援助活動の重要性と成功例ばかりが取り上げられ、その背後にある地元住民の生活習慣、人間関係、価値観、社会組織の変容を人類学的視野から分析するということが未だ不十分な傾向にあるということは指摘されなければならない。

受益住民の利益、持続可能な発展を考慮し推進した結果生じた文化変容を分析検証することは、今後あるべき開発の再定義につながる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、開発地域での「住居」及び「居住形態」の調査を通して、社会構造の変容を捉えることにある。具体的には、メトロマニラ周辺における不法占拠地域開発をケーススタディとしてフィールドワークを実施し、住民とのインタビューによる生活様式の実態調査、及び住居の実測調査を行う。

援助協力への人類学的貢献という側面で見した場合、組織や評価活動における提言にとどまるのではなく、住居及び居住形態の調査結果を技術的に応用する学際的側面を追求したい。本研究を「建築人類学」という文化人類学理論の応用の第1段階として位置付ける。

3. 研究の方法

研究方法は、①現地でのフィールドワーク（一次資料）、②援助機関へのヒアリング（一次資料）、③文献資料の読解（二次資料）による。フィールドワークは、文化人類学の調査法である参与観察、インフォーマルインタビューを用いる。住居に関しては実測調査を実施する。

*¹ Universität Zürich Doktorand

*² Universität Zürich Professor

*³ 早稲田大学 教授

4. 調査概要

4. 1 調査地域の選定について

メトロマニラは他の発展途上国と同様に広範囲にわたってスラム地域が形成され、多くの不法占拠者^{注1)}を抱えている。不法占拠者は年々増加の傾向にあり、正確な数値の把握は困難であるが、概ねメトロマニラ人口の35%~40%が不法占拠者と言われている。そもそも第三世界のスラム地域のほとんどは不法占拠地域であり、スラム改善プロジェクトは土地の所有権の問題を抜きにしてはうまく機能し得ない^{注1)}。つまり土地所有権の問題の解決を図ることで、住民が住宅改善への関心を高め、プロジェクトが成功するケースも多いのである。都市貧困者の住居及び居住形態を考える上で土地所有権は重要な要素である。土地所有権取得とスラム地域改善を同時にはかる手法として、フィリピンではコミュニティ融資事業^{注2)} (Community Mortgage Program: 以下CMP)がある。

本研究では、土地所有権の有無を調査地選定のキーワードとして、土地所有権をもつCMP地域と、一方土地所有権を持たないフィリピン大学内のコミュニティを選定した。

4. 2 CMPの概要

スラム・荒廃地整備のためCMPは1988年にアキノ大統領によって制度化された。CMPは都市開発・住宅法(1992年Urban Development and Housing Act: UDHA)にも規定され、さらに実施面においてガイドライン^{注2)}(1996年)が策定された。CMPは土地所有者に売却意思がある場合、不法占拠者に対して、その占有している土地の所有権を取得させる融資システムである。オンサイト・オフサイトの両方がある。対象地域では土地取得と同時に、区画割の再編、並びに水道、電気、下排水などの施設及び設備の導入を図る。基本的な考え方は土地所有権を安定させることによって、居住者自身による地域の改善、住宅建設が促進されることを期待するものである。CMPは3段階のプロセスからなる。第1段階は、土地の取得及び土地所有権の受益者への配分、第2段階は地区整備及び土地配分、第3段階は住民による住宅建設・改善である。

CMPの実施に当たり居住者は、オリジネータの援助を得て地域共同組合(Home Owners Association: 以下HOA)を結成しなければならない。オリジネータはNGOや地方自治体など政府の認定を受けた団体であり、HOAの結成段階から住居建設段階までコーディネータとしてCMPを推進していく。HOAは資金を借りるために、土地を取得すると同時にその土地を担保として、政府住宅金融公庫(National Home Mortgage Finance Corporation: 以下NHMFC)から低金利の融資を受ける。HOAは住民から返済金を回収し、NHMFCへの支払いを行う。CMPは土地所有権取得とスラム地域改善を同時にはかるプロジェクトとして多くの成功事例が報告されている^{注3)}。

4. 3 調査地域の概要

CMPで最大の実績を持つFoundation for the Development of the Urban Poor^{注1)}(以下FDUP)のプロジェクトから異なる実施段階にある3地域を選定した。そのうち2地域は、それぞれオンサイトとオフサイトのCMPであり住民は土地を取得し、CMPは最終フェーズの第3段階にある。残る1地域はオフサイトのCMPで第1段階(住民のスクリーニング中)にあり、移転前の不法占拠地域も調査対象としている。

土地所有権は持たないが、居住権を認められている地域としてフィリピン大学デリマン校キャンパス内の不法占拠地域^{注5)}から1つを選定した。この地域は現在Urban Poor Associates^{注6)}(以下UPA)およびTAO-Pilipinas, Inc.^{注7)}が大学と対象住民の間で活動しており、UPAによる事前調査が終了した段階である。フィリピン大学は不法占拠者に対して居住権のみを保証する旨を表明し、土地所有権は認めないとしている。

調査地域の詳細について、表4-1に示している。

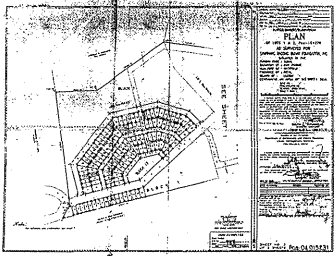
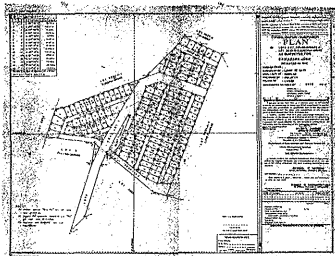
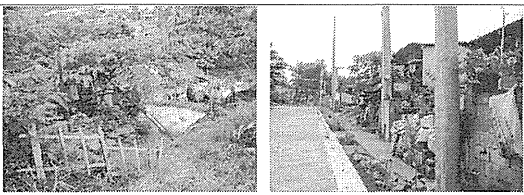
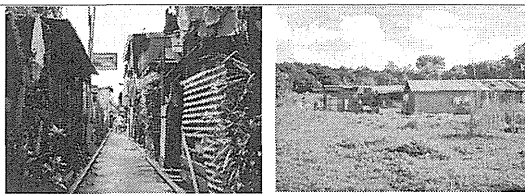
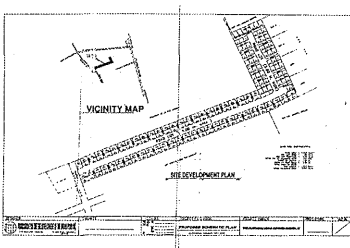
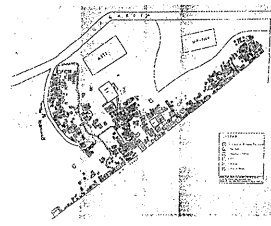
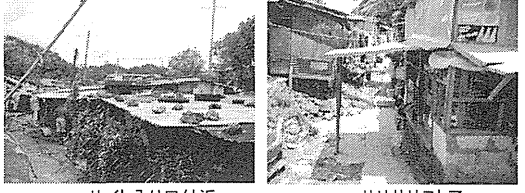
4. 4 調査概要

2004年8月および2005年9月に上記4地域(表4-1)でフィールド調査を実施した。住居の実測調査を行ったのはSAN AGUSUTIN-HOAが5件、SAMARIMA-HOAが3件、MACODA-HOAが5件、Daang Tuboが5件の計18件、また計50人へのインフォーマルなインタビューを実施しデータを収集した。SAN AGUSUTIN-HOAとSAMARIMA-HOAは、FDUPの地域コーディネータPraxie B. Surquia氏、MACODA-HOAは同じくFDUPのJason Miranda氏、Daang TuboはUPAのBench Gegrimos氏と共にインタビューを行った。

調査地域でインタビューを実施する前には、まず地域コーディネータと共にコミュニティリーダーの家を訪問し、インタビュー調査の目的と方法についてリーダーの承認を得る。初日は調査者、地域コーディネータおよびリーダーの3人でコミュニティをくまなく周りコミュニティの住民に顔を覚えてもらうことから始まった。CMP事業はオリジネータの役割が非常に高い。地域コーディネータは受益者のスクリーニングから土地の受け渡しまでの一連の過程において地域住民と直接対応する立場にあり、地域住民の信頼を勝ち得ている。地域コーディネータと共にインタビューすることにより住民と率直な意見を交換することが可能となった。インタビューでは、住民に対する網羅的で一方的な質問形式を避け、何度も同じ家を訪問することで住民とのオーラルなコミュニケーションを行っている。

インタビュー内容はパーソナルヒストリー、教育環境、教育レベル、コミュニティとの関係、就業状況、宗教、親族関係、所属団体、近隣関係、NGO・NPOとの関係、コミュニティリーダー選出方法など多岐に渡る。事前に地域コーディネータとインタビュー内容について話し合い、十分に

表4-1 調査地区の詳細一覧

地域共同組合	SAN AGUSTIN-HOA (San Augustin Homeowners Association, Inc.)	SAMARIMA-HOA (Samahang Maralita Sa Riles Ng Marilao Homeowners Association, Inc.)
住所	San Augustin Village, San Roque, Antipo city	Brgy. Loma de Gato, Marilao, Bulacan
種別	コミュニティ融資事業 オフサイトプロジェクト	コミュニティ融資事業 オフサイトプロジェクト
支援団体	FDUP	FDUP
受益人数	106世帯	124世帯
ステータス	第3段階（プロジェクト終了）	第2段階（書類ベース終了，移住開始，住宅建設段階）
土地面積	6447m ²	8076m ²
サイトマップ	 出典：FDUPのプロジェクト資料より	 出典：FDUPのプロジェクト資料より
サイト写真	 移住前 移住後	 移住前 移住後
概要	SAN AGUSTIN-HOAは、Taytay, Rizal 地区のSIMONA Homeowners Association のインフラ開発の影響を受け、CMPの援助を受けるための地域共同組合として設立された。2003年12月から移住地への入居が始まっている。資金源はCMPによるローンと個人預金（他のNGOのマイクロクレジットプロジェクトによる）である。土地の前所有者への支払いも終了し、第三段階にある。現在71ユニットの住居が建設され60世帯ほどが入居している。そのうち10ユニットは建設途中で窓レベルまで出来上がっている。	SAMARIMA-HOAは、Marilaoの二地区（PNR Property, Moldex Property）のインフラ開発の影響を受け、CMPを受けるための地域共同組合として設立された。移住が決定している数家族はすでに移住を開始しているが、移住対象となる住民のスクリーニングとコンサルティングもFDUPによって進められている。資金源はCMPによるローンと個人貯金である。移住地域は更地の状態で、共同施設として、水の確保のための井戸が掘られている。移住を開始した住民は木材で仮住居を建設中である。
地域共同組合	MACODA-HOA (Manolo Compound Daladanan Homeowners Association, Inc.)	DAANG TUBO
住所	G. Lazaro St., Manolo Compound, Daladanan, Valenzuela	inside the University of the Philippines Diliman Campus
種別	コミュニティ融資事業 オンサイトプロジェクト	フィリピン大学内改善事業 オフサイトプロジェクト
支援団体	FDUP	UPA
受益人数	161世帯	786世帯
ステータス	第2段階（書類ベース終了，住宅移設，住宅建設段階）	事前調査終了，実施計画段階
土地面積	5349m ²	25000m ²
サイトマップ	 出典：FDUPのプロジェクト資料より	 出典：COMMUNITY AND HOUSEHOLD PROFILE OF POOK TAANG-TUBO, UPA, 2004
サイト写真	 既存住居 建設途中	 サイト入り口付近 サリサリストア
概要	MACODA-HOAは、オンサイトCMPである。既存住居が建つ土地を取得して、対象住民に土地を再配分する。しかし再配分された土地に既存住居がある場合、すぐには移動が完了せず計画通りに住居が建設されるまでには時間がかかる。現在は既存住居と移設住居が混在している。この土地は水はけが悪く、雨季には池のように高さ30～40cmまで浸水する。早急に解決する必要がある。コンクリートブロックで作られた住居はきれいに壁仕上げを行っていて、土地取得に伴って恒久的な住居を構築できる住民の意思が伝わってくる。	Daang Tuboはフィリピン大学内で不法占拠している19地域のうちのひとつである。フィリピン大学構内における不法占拠はここ8年ほどで大幅に増大し、2004年時点で19,234世帯が確認されている。大学側は土地所有権(security of tenure)を主張する一方で、不法占拠者が土地に住む権利を認めつつ大学構内の開発を進める方針を打ち出している。不法占拠者は空いている土地に住みついでおり、コミュニティは迷路状となっている。未舗装の路地は、雨季の雨で川となる。街灯はなく、夜は暗闇となり治安が悪化している。

予備知識を得ることが住民の率直な意見を聞く材料となった。

5. 調査結果

まず居住概要と住居構造について述べ、次に住居内部の実態調査から、狭小な生活空間への対応とその結果生まれる空間機能について、その特徴を分類する。また、ケーススタディとして2つの住居を取り上げる。実際の家族構成や生活ニーズの変化に対して、住民はどのように柔軟な居住形態をとっているのか。住居のフレキシビリティの実態を読み取りたい。

住居・居住者の概要は表 5-1、居住者・空間構成・空間利用の関係は表 5-2 に示している。

5. 1 居住概要

ここでは、居住者関係、および近隣関係について見ていきたい。

5. 1. 1 同居者関係

Daang Tubo では核家族が 78% を占め、スラム地域で典型的と思われた大家族^{※8)} はわずか 9% にすぎない (図 5-1)。スラム地域においては経済的援助を親族同士のつながりに求める傾向が強いが、親族同居とは直接的に結びついていない。

SAN AGUSTIN-HOA, MACODA-HOA, SAMARIMA-HOA の3地域 (以下、CMP 地域) においても核家族が多数を占めている。CMP 地域では HOA への参加が核家族単位ということがひとつの理由である。特にオフサイトの CMP 後には、親族と同居する大家族から核家族へ移行する。

共通しているのは両親と同居している夫婦についても生活空間の独立を望む意見が多いことである。このことは結婚後に生活空間を独立させる伝統的な居住体系を踏襲している^{※9)}。

また、教育の浸透による雇用機会の増加も挙げられる。教育を受けた住民は少しでもいい職業に就くため、仕事を求めて他のコミュニティに移動していく傾向が強い。また両親は地方からの移住者であり、娘や息子が独立して新しいコミュニティへ行くことに対して寛容な態度を持っている。子供達の独立を両親が許容する背景には、貧困解消への期待感が強くある。

本調査によって、生活空間は基本的に核家族単位ということが明らかになった。

5. 1. 2 近隣関係

CMP 地域では、近隣者の多くは非血縁者である。その理由は上記と同様 HOA への参加が核家族単位のために、血縁者同士が離れてしまうケースが多いからである。また、オフサイトの CMP 地域では、移住前後で近隣関係が維持され

ないため、住民は移住先で近隣関係を再構築する必要がある。SAN AGUSTIN-HOA においても移住前後において近隣関係を再構築する必要があった。しかし住民同士は移住当初から非常に良好な関係を保っている。その理由としては HOA 設立時からの住民参加が挙げられる (考察 6.4 参照)。

Daang Tubo においては、血縁者同士が近隣関係にある事例が多い (表 5-2)。夫婦は両親の住居に隣接して住居を構築している。一方、非血縁者同士の近隣関係も非常に重要である。住民は、食事、仕事、電気や住居のメンテナンス、セキュリティ、礼拝、教育など生活全般にわたって近隣との協力は欠かすことができない。以下の住民意見にもあるように、親族関係よりも近隣関係を重要視する話も多数聞かれた。

“姉はここから 30km 離れた別のコミュニティに居るので、普段の生活ではなかなか会えません。会いに行くのは月に数回で、現在の生活の上で最も重要な関係はコミュニティの友人です。友人には仕事の紹介をしてもらったし、息子は友人の子供と一緒に小学校に通っています。” (Daang Tubo の住民意見)

ここで近隣関係の強化・維持に重要な伝統的慣習として儀礼親族関係^{※9)} について言及する必要がある。調査地域すべてにおいて住民同士は密接なコンパドレ・コンマドレ関係^{※10)} を持ち、非血縁者同士の近隣関係の強化をはかっていた。

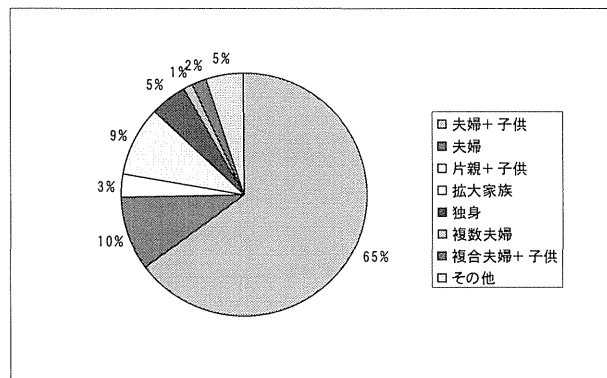


図 5-1 Daang Tubo における同居者関係

出典：“Community and Household Profile of U.P. Pook Daang Tubo”^{※4)} より作成。

5. 2 住居構造

次に、住居の物理的状況について見ていきたい。

5. 2. 1 住居サイズ

CMP により、SAN AGUSTIN-HOA では1区画あたり、住居 20 m²、オープンスペース 10 m²、計 30 m²が割り当てられている。MACODA-HOA, SAMARIMA-HOA も同様の面積が割り当てられているが、この2地域では住居、オープンスペースという区別を設けていない。そのため住民は敷地全体

に住居を建設している事例が多く見られる。

一方、Daang Tubo の住居面積は 10～15 m²の割合が最も高い。8 割強の住民は 20 m²以下の住居で生活しているのである。CMP によって割り当てられる 30 m²を越える住居を確保しているのはわずか 14%であり、狭小な居住空間で生活していることが分かる^{※5)}。

5. 2. 2 建築材料について

CMP 地域では、コンクリートブロックによる住宅が多数を占めている。SAN AGUSTIN-HOA では入居以前に、HOA によって窓枠のレベル（1.5～2.0m程度）までコンクリートブロックで建設される。住民は入居後、窓枠より上部をセルフビルドする。入居当初は木材で仮設されているが、徐々にコンクリートブロックによって置き換えられ、モルタルを塗って壁の仕上げを行う。MACODA-HOA、SAMARIMA-HOA では基礎工事からすべてセルフビルドである。

一方 Daang Tubo においては 9 割の住居は平屋建てで、廃棄材料を再利用して、主に木材、トタン板の組み合わせによって建設されている。住民は不法占拠地であるということ認識しており、特に居住地の移動を余儀なくされてきた住民は、コンクリートブロックによる住居建設を諦め、廃材による一時的な住居の建設にとどまっているケースが多く見られる。

“いつ移動するか分からない状況では住居の修繕にお金をまわすことは出来ません。ずっとここに住めるなら徐々にでも住居を改善していきたいけど、まずは生活費にお金を回すのが先決です。”（Daang Tubo の住民意見）

CMP 地域と Daang Tubo での住居改善に対する意識の差が明確に現れている。

5. 3 空間構成

貧困地域における住居は狭小であるがゆえに、さまざまな形で住居の拡張が行われている。ここでは Daang Tubo の平面方向拡張と、CMP 地域の垂直方向拡張という、土地所有権の有無によって特徴的に見られた二つの空間構成について説明する。

5. 3. 1 平面方向への拡張

Daang Tubo では平面方向へ住居を拡張していく事例が多い。その理由は、不法占拠地域であるがゆえに、隣地境界線が存在しないため、住居は拡張が容易である平面方向へ増築し、隣家ぎりぎりまで拡張する。住居同士は非常に接近しており、迷路のような狭小路地が形成される。廃棄木材を再利用して建設しているため、構造的にも強度が十分とはいえず、垂直方向への拡張には適していない。平面方向への拡張が不可能なときは、ロフトを作成することで

内部空間を拡張していく。

5. 3. 2 垂直方向への拡張

CMP 地域では 30 m²の敷地の中に立てられたワンルームの空間は様々な用途（個室、台所、寝室、物置、物干し場など）に利用される。土地所有権が明確で、隣地境界線が存在するため垂直方向への拡張が多く見られる。また、建築材料としてコンクリートブロックが使用された結果、用途に応じた増築が可能となった。

また MACODA-HOA で特徴的だったのは土地の水はけが悪く、雨季はコミュニティ全体が 0.4m 程度浸水することである。そのため、住居のほとんどは高床式で垂直方向へ拡張していくのである。

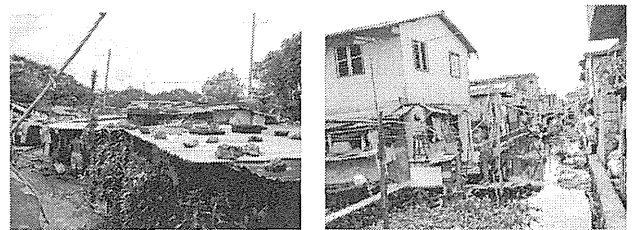


写真 5-1 Daang Tubo (左) MACODA-HOA (右) における住居
(2004 年 8 月撮影)

5. 4 空間利用

ここでは 18 件の住居について行った実測調査および聞き取り調査から、特徴的な空間利用の類型化を行い、その傾向を見ていきたい。

5. 4. 1 個室（ベッドスペース）の作成

実測調査したほとんどの住居で個室の作成が見られた（表 5-2）。個室作成はベッドスペースの確保が主な理由であり、その方法にはいくつかの共通点がある。ここでは、個室作成の理由についてまとめ、間仕切り方法を「半透明な間仕切り」と「不透明な間仕切り」に分けて説明する。

1) 間仕切り方法

半透明な間仕切りとしては、カーテンなど半透明な素材による圧迫感のない個室の作成が挙げられる。また、部屋にレベル差を設けて視線の位置を変えることにより、物理的には仕切りを設けないが、意識的には緩やかな仕切りを感じるような工夫もなされていた。狭小空間で圧迫感を持たずに生活するための工夫といえる。

不透明な間仕切りとしては、ベニヤ板などの不透明な素材によって分けられた個室がある。また、ロフトや上階の作成という方法でひとつの閉鎖的空間を作成し、ベッドスペースとして確保している住居も多数ある。作成された不透明な個室空間においても声は筒抜けであり、視線の遮断がその目的といえる。

表5-1 調査住居一覽

コミュニティ		基本情報	特記事項
S A N A G U S T I N	①	滞在年数：1年 家族：5人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり 母(49)：サリサリストア 長男(28)：配達業 長男の妻(29)：専業主婦 孫(男)(2) 孫(男)(0)	<ゆるやかな間仕切り> 2003年12月に移住してきたばかりである。父は亡くなっていて、母と嫁が2人でサリサリストアを経営している。住居内部は生活空間としてのみ使い、庭のスペースを使用してサリサリストアと簡単な食事を提供している。長男は配達業をしている。フールームは、リビングと寝室に大きく二分されており、ベッドルームは、薄いカーテンによって緩やかに区切られている。ベッドスペースには窓から風が入ってくる。心地よい空間で孫が気持ちよさそうに寝ていた。小さくしたリビングに座った視線はカーテンによる緩やかな仕切りを透過し、圧迫感を与えない。
	②	滞在年数：4ヶ月 家族：5人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：なし 父(40)：塗装業 トライシクルドライバー 母(36) 長女(12) 長男(10) 次女(2)	<ベッド数の確保> 日本の伝統的な家屋では、朝起きたら布団を押入れにしようということは当たり前であった。しかし、ベッドを使用している土地ではベッドスペースとしてある一定の空間が必要となる。つまり家族が5人いれば、5人分の寝るスペースが必要といえる。ここには、リビング(テレビ)の前、台所の後ろ、横の欄にベッドスペースが取られている。寝室スペースをまとめるのではなく、家族それぞれが部屋の端に陣取って寝ることになる。5人分のスペースを考えると、それだけで住居の半分が必要になる。
	③	滞在年数：これから 家族：7人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり 父(43)：マーケット肉屋 母(41)：専業主婦 長男(17)：大学生 次男(15)：高校生 三男(12)：小学生 長女(9) 小学生 次女(6)：小学生	<コミュニティリダの威厳を示す> 日本の伝統的な家屋では、朝起きたら布団を押入れにしようということに当たり前であった。しかし、ベッドを使用している土地では、屋根を整備して、周りの建物と一線を画している。リビングと寝室のスペースを完全に独立させている。7人分の寝るスペースの確保が空間構成の問題となったが、斜面を利用して半地下室を作り、父と母の寝室とすることで解決を図っている。家族はマーケットで肉屋を営み、平日はマーケットの近くに居住しているためコミュニティにはあまり戻らない。
	④	滞在年数：1年 家族：4人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり 父(38) 母(37)：ヘアドレッサー 長男(14)：高校生 次男(16)：高校生	<家の拡張> 家の拡張工事中であり、セルフビルドである。拡張部分は寝室にするそうだ。2人の子供が成長し、個室の確保を望んでいる。母はリビングを利用してヘアドレッサーを営んでいる。平日は父は仕事、長男と次男は学校で不在のため、お店の経営には問題ないそうだ。母は、日中の時間に家を使うおとうと1番自由なのである。
	⑤	滞在年数：1年 家族：6人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：なし 父：建設業 母：専業主婦 長男：父の手伝い 次男：高校生 長女：独立 次女：独立	<斜面の利用> 父は建設の仕事を行っており、長男は父の手伝いをしていて、母は専業主婦である。長女、次女は家を出ているため、現在は高校生の次男を含めて4人暮らしである。 一見したところ1階建てに見えるこの家は、斜面を利用して2階建てにしている。入口を入ってすぐのリビング空間は2階部分になり1階部分にキッチン・トイレ、寝室がある。寝室のスペース分を1階に移動したため、広いリビング空間を確保している。2階からは斜面に沿って作られている家々が一望できる。小さな庭では、植物を育てている。
S A M A R I M A	⑥	滞在年数：30年 家族：6人 コミュニティ内の親戚：甥 儀礼親族：あり 父(47)：建設業 母(41)：専業主婦 長男(23)：トライシクルドライバー 姪(12)：小学生 長女(20)：専業主婦 長女の夫(22) 孫(女)(1)	<階段のコンクリート部分> 両親と長女夫婦が同居している。2世帯仕切ることなく、寝室も同室である。母は新しい土地に引っ越したら、サリサリストアを営営してみたいそうである。 入口を入ってまず台所があり、続いてリビング、階段を上って2階が寝室である。階段の最初の2段分だけコンクリートになっているのはなぜか質問したところ、雨による浸水が多いので、2段だけはコンクリートにしたとのことであった。建設業している父の発想である。
	⑦	滞在年数：26年 家族：6人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり 父(54)：建設業 母(46)：サリサリストア 長男(22)：いない 長女(24)：いない 次女(23) 三女(20)	<寝室を浸水から守る> 父は建設業、母はサリサリストアを営んでいる。サリサリストアの品物の盗難を防ぐために、鉄格子間に綱を張っている。鉄格子を通して品物が見えるのが看板代わりである。お金の受け渡しは極小さい。母の話によると、「何もやらぬよりは少しまし」という程度しか売れていないそうだ。空間はキッチン兼サリサリストア、父母の寝室、娘の部屋の三つに別れ、娘の空間を壁で隔離して確保している。入口を入ってすぐリビングとキッチンがあり、80cm上がついて寝室になっている。寝室が1段上になっている理由は、雨季のスコールを考慮して就寝中の浸水に備えているからだ。
	⑧	滞在年数：25年 家族：5人 同居数：9人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり ファミリー1：父(65) 長男(36) 次男(32) 三男(23) ファミリー2：父(33) 先生 長女(12) 小学生 長男(9) 小学生 次男(7) 小学生 次女(3)	<2つの父子家庭同居> 2つの父子家族が同居している。血縁関係のない家族同士が同居している例である。子供が多く、住居内はとにかく服が溢れかえっている。家事は長女が行っている。 同居形態はファミリー1が居候している形であり、寝室スペースが確保されているだけである。2家族のスペースは、はっきりと壁で区切られているが、ベニヤ板によって間仕切りしてあるだけなので、遮音は期待出来ない。区切られているという意識を持っていることが大前提なのである。リビングとキッチンはファミリー2が主に使用している。
M A C O D A	⑨	滞在年数：27年(施工後) 家族：7人 コミュニティ内の親戚：いとこ 儀礼親族：あり 父(46)：電気業 母(46)：専業主婦 長女(22)：専業主婦 長女の夫(22) 無職 孫(女) 次女(20) 母の妹(40)	<黄色い壁と赤い柱> MACODA-HOAは水垢がひどいため、6段階段で上がったところが1階の入り口となる。まず赤に塗られた階段の手すりが見える。壁は黄色、柱は赤で統一されている。これは父の趣味だそうである。7人分のスペースが必要となる寝室は、2階にまとめる。1階はリビング兼キッチン、トイレがあり、家族の共有スペースである。2階は寝室は、長女と長女の夫、次女と母の妹、父と母と孫がそれぞれ同室で寝ている。家の横には側道があるはずだが、隣家によって占拠されている。
	⑩	滞在年数：32年(施工中) 家族：4人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：なし 父(44)：工場で働く 母(65)：専業主婦 長男(36)：事務員 長女(30)	<階段によって空間を切断> 2階+屋上がある。CMPで割り当てられるスペースの2家族分の広さを使っているため通常の2倍の敷地面積がある。この家は部屋の広さを利用してリビングとキッチンに分けている。入り口を入って左手にリビングがあり、奥のキッチンスペースとは階段によって分断されているため、奥で料理している姿はリビングからは見えない。2階は寝室になっている。長女と次女は個室を持つ。2階には父と母の寝室があり、屋上はパティオスペースとして利用している。
	⑪	滞在年数：22年(施工中) 家族：2人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：あり 父(65)：引退している 母(64)：専業主婦 長男：いない	<老夫婦のための家> 老夫婦2人で住むための家である。息子はMACODA-HOAには住んでいないが、家作りに関して色々サポートしているそうだ。1階のドアは道路から少し奥まったところに位置している。雨のスコールが直接入口に入らないようにしている。1階部分は鉄格子で囲んでいる。1階は入って右手にキッチンとトイレがあり、左手にリビングがある。1階に共有スペースをまとめる。2階が寝室である。暮らすのは2人だけの予定であるが、親族が一時的に出入りしているようだ。
D A N G T U B O	⑫	滞在年数：1年 家族：4人 コミュニティ内の親戚：なし 儀礼親族：なし 父(32)：トライシクルドライバー 母(29)：先生 長女(3) 長男(1)	<片流れの屋根> 父はトライシクルドライバーをしながら、サリサリストアを営んでいる。母は小学校の先生である。小さなサリサリストアであるが、寝るまでにはいくらかは売れるようだ。内部に冷蔵庫はあるがキッチンは外部に設置している。やはり、内部に作るには狭すぎる。外壁を仕上げ、2階を作りたいとの希望を持っている。 なぜ片流れの屋根が質問したところ、まだ出ていないがこの建物の左にも家が建つので、雨を右の側道に落とすように片流れにしたとのことであった。デザインではなく、物理的な要請があったのだ。
	⑬	滞在年数：22年 家族：6人 コミュニティ内の親戚：2家族 儀礼親族：あり 父(42)：運送業 母(39)：先生 長女(15) 次女(8) 母の妹(35) 母の妹(24)	<女性の多い家> 母の妹が2人同居し、子供も2人共女の子なので、男性は父親1人である。共働きの家庭であるため比較的稳定した収入がある。両親が不在のとき、子供の世話も妹に任せている。 この家はコミュニティの中で1番大きな敷地を持つ。2階建てだが、浸水対策で1階部分が非常に高い3階建てのような印象を持つ。1階にリビング、キッチン、食卓、トイレと共有スペースがあり、2階の約半分のスペースが父と母の部屋、次に長女と次女の部屋が大きく、母の妹の2人部屋が1番小さなスペースとなっている。さらに屋上があり、親戚を呼んでパーティを行う。
	⑭	滞在年数：13年 同居数：8人 コミュニティ内の親戚：2家族 儀礼親族：あり 祖母(59)：サリサリストア 父(28)：トライシクルドライバー 母(29)：サリサリストア 長男(8) 小学生 長女(4) 母の妹の夫(29)：トライシクルドライバー 甥(5) 甥(2)	<リビングルーム兼キッチン兼寝室> 父親はトライシクルドライバー、家に残る祖母と母親はサリサリストアを営んでいる。子供は2人、長男は公立小学校に通っている。コミュニティ内に友人は多いが住居内にはほとんど来ないとのことであった。 空間は主に、サリサリストア、リビング兼キッチン兼寝室、寝室の三つの空間に分けられ空間の戸は存在しない。サリサリストアが道に面し外の光が入ってくる。リビングや寝室には窓はないが、台所の上にトップライトがあり、天井から光が入ってくる。夜、リビングは寝室へと機能を変える。
D A N G T U B O	⑮	滞在年数：12年 同居数：4人 コミュニティ内の親戚：2家族 儀礼親族：あり 父(38)：メンテナンス(フィリピン大学) 母(39)：サリサリストア 長女(5) 長男(1)	<ロフトを作り寝室にする> 父親はフィリピン大学の電気メンテナンスの仕事をしているが、調査したときは家でテレビゲームをやっていた。母親が経営しているサリサリストアはコミュニティ内で1番物が豊富である。日用品やお菓子類はもちろんのこと、音楽CDや映画のVCDを販売している。空間は約3分の1がサリサリストアで、キッチン、寝室、ロフトに分かれている。寝室からハシゴでロフトに上れる。ここには電子ピアノが置かれていて、ロフトは子供部屋であり、寝室であり、物置でもある。ロフトは明かり窓がある。この周辺のほとんどの家が1階建てのため、ロフトからお店はもちろん、窓から周りの屋根が見渡せる。
	⑯	滞在年数：27年 同居数：10人 コミュニティ内の親戚：2家族 儀礼親族：なし 父(52)：ガラス職人 母(54)：サリサリストア 長男(27)：コピー屋 長男の妻(32)：専業主婦 孫(女)(3) 孫(女)(2) 孫(男)(1) 孫(男)(0) 長女(17) 母の姉の夫(60)	<2世帯が住む家> ひとつの建物の中で、2世帯が住めるように工夫されている。この家で特徴的なのは、長男夫婦の部屋がしっかりと区切られていることである。部屋は戸によって他の空間から独立している。テレビは居間と、長男夫婦の部屋の間に設置している。台所も2つあり、2世帯が独立した空間を持つと工夫している。長男が結婚した時に、既存の住居を平面方向へ拡張して長男夫婦の独立した部屋を作った。サリサリストアの上はロフトになっている。父と母の寝室である。
	⑰	滞在年数：21年 同居数：6人 コミュニティ内の親戚：2家族 儀礼親族：あり 父(45)：配達業 母(42)：サリサリストア 長男(23)：配達業 長男の妻(21)：専業主婦 孫(3ヶ月) 長女(22)：無職 次女(16)：大学生(私立)	<とにかく個室を作る> 住居は、両親の部屋、長男夫婦の部屋、長女の部屋がしっかりと壁で仕切られている。木造でなければ、コンクリートの壁にしているところだろう。父はサリサリストアを営営し、あんまり外出することなく家にいることが多い。部屋に必要なものの何かに質問し、もっと大きなスペースがほしいとの話である。個室のスペースを確保することで共有スペースが圧縮される。
D A N G T U B O	⑱	滞在年数：11年 同居数：3人 コミュニティ内の親戚：1家族 儀礼親族：あり 父(28)：配達業 母(29)：専業主婦 長女(9) 小学生(公立) 次女(2)	<最小限の生活空間> 1辺が約2.5mのほぼ正方形の家であり、調査中で最小のスペースである。1階には台所とテーブルテレビなどが置かれ、すべての機能がこの中に納まっている。2階は電子ピアノが置かれ家族4人の寝室となっている。張出しのベランダがあり、大量の洗濯物が干してある。トイレと洗面は、すぐ隣に住む母の家を借りている。夫婦はまだ若い。とにかく両親から独立して生活するため、まず自分たちの空間を望んだ。極小スペースの家まで作成していることにその決意が見られる。独立という意味合いにおいて、台所は必須なのである。

表5-2 居住概要・空間構成/利用 一覧図

地域協同組合	居住概要										構造				空間構成				空間利用										地域別考察							
	潜在年数	同居人数	同居者関係				近隣関係			就業		木造	ブロッククリート	ワンルーム	横拡張			縦拡張		プライベート						パブリック										
			核家族	拡大家族	儀礼親族	非親族	親族	儀礼親族	非親族	コミュニティ内	コミュニティ外				無職	接続	付加	ロフト	複数階	間壁仕切り	間壁仕切り	間壁仕切り	台所	独立	共同	又は外部空間	庭・屋上	ワークスペース		道路のスペース						
S A N A G U S T I N	①	1	5	○				○		○		○	●									●	○	○	○											
	②	0.4	5	○					○		○		○										○	○	○											
	③	0	7	○						○		○										●													○	
	④	1	4	○					○		○		○									●														
	⑤	1	6	○						○		○										●														
R S I A M M A A	⑥	30	6		○					○		○										○														
	⑦	26	6	○					○		○		○									●														
	⑧	25	9					⑤		○		○										○	○	○	○	○										
	⑨	27	7		○				○		○		○																							
M A C C O D A	⑩	32	4	○						○		○										●														
	⑪	22	2	○						○		○										●														
	⑫	1	4	○							○		○									●														
	⑬	22	6		○				○		○		○																							
D A A N G T U B O	⑭	13	8		○					○		○										●														
	⑮	12	4	○					○		○		○									●														
	⑯	27	10		◎				○		○		○									●														
	⑰	21	6		○				○		○		○									○														
	⑱	11	8		◎				○		○		○									●														
項目別考察	ひとつの住居は核家族で構成されていることが多く、拡大家族がそれに続く。儀礼親族との同居はみられなかった。CMPでも近隣関係に儀礼親族関係がみられる。またDaang Tuboでは両親の近くに住む形で息子・嫁夫婦が住居を建設しているケースが多い。										ワンルームから縦・横方向への拡張が見られる。拡張理由としてはベッドスペースの確保が多い。				住居空間の大部分のスペースは寝室空間に利用され、残りの空間はリビング、ワークスペース、食事空間など様々な機能に兼用されている。狭小空間を利用するため、生活機能が外部化している。				●: 空間構成と空間利用 ◎: 居住者と空間利用																	

2) 個室作成の理由

以下、3つのケースを通して、調査地域で共通して見られる特徴を同居者関係という点から読み取りたい。

＜核家族における子供の成長＞

両親と共に寝ていた子供は、成長するに伴いベッドスペースを必要とする。SAN AGUSUTIN-HOA のケース（図 5-2）では、ワンルームはリビングと寝室に大きく二分されており、薄いカーテンによって緩やかに区切られている。採光の窓がとられ、風も入ってくる。ベッドスペースとして心地よい空間になっており、子供は気持ちよさそうに寝ていた。縮小されたリビングからの視線は、カーテンによる緩やかな間仕切りを透過するため、圧迫感を与えない。

“ただでさえ小さな部屋を壁で仕切るのはしたくないし、家族だから部屋を別にすることも必要ありません。子供が大きくなってきたら、二階を作ってベッドスペースとしたいと思っています。”（長男の妻の話）

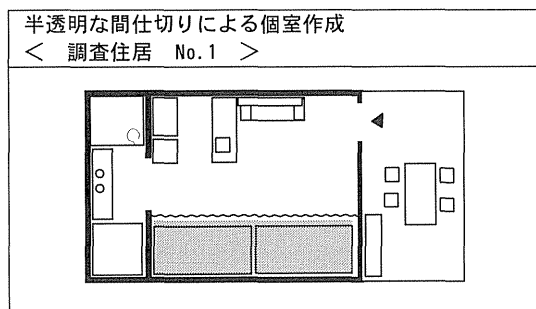


図 5-2 SAN AGUSUTIN-HOA の個室作成

＜拡大家族＞

拡大家族の場合も核家族単位別に個室を持つ傾向がある。Daang Tubo におけるケース（図 5-3）では、長男夫婦のために、ベニヤ板で仕切られた個室を作成している。結婚後、長男はコミュニティを移動して新しい住居を作成する予定であった。しかし仕事が見つからないため、配達業の父を手伝いながら両親と同居中である。

“電気の仕事があったらコミュニティから出て新しく家を作りたいのですが、なかなか仕事が見つかりません。家には仕事が終わってから帰って寝るだけなので寝室が確保されていればいいです。”（長男の話）

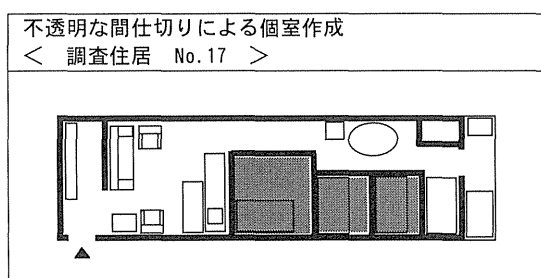


図 5-3 Daang Tubo の個室作成

＜複数家族同居（非親族同士の同居）＞

複数世帯の同居は、Daang Tubo および CMP 地域でも稀であった（表 5-2）。SAMARIMA-HOA のケース（図 5-4）では、ひとつの住居に二つの父子家庭が同居していた。住居の所有者は長女、長男、次男、次女の4人の子供を持ち、妻は亡くなっているため5人家族である。彼の職業は小学校の先生である。友人の家族にひとつ部屋を貸与しているが、友人は無職のため家賃はもらっていない。世帯同士の間はベニヤ板で仕切っており、視覚的には完全に独立している。台所とトイレは共同使用である。仕事の間は友人に子供達の世話をしてもらっているため、お互い同居のメリットが存在している。

“最初は一時的に貸す予定だったのですが、今は半年ぐらい同居しています。仕事の間子供の世話をしてもらっているのは助かりますが、もうすぐCMPで移転するために私も仕事を探さないといけません。移転後は、友人がこの家で引き続き住むことになると思います。”（父の話）

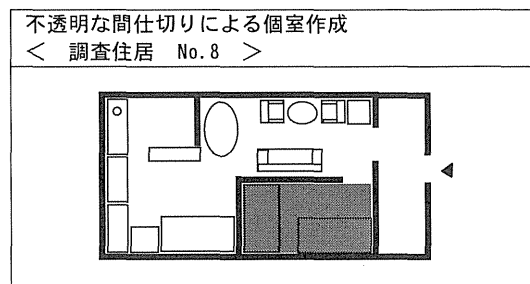


図 5-4 SAMARIMA-HOA の個室作成

5. 4. 2 台所の独立

拡大家族では世代ごと台所を独立させる事例が見られた。台所空間を独立させることで、親世代と子世代の生活機能を分割して居住することが可能となる。Daang Tubo のケース No. 18（表 5-1）では、子世代は両親が住む母屋に接続する形で小さな個室を作成し、寝室と台所を独立させている。新婚である夫婦は、結婚後は小さくても独立した部屋と台所を持ちたかったという。

“仕事が出来たら別の場所に移動するのはかまいません。姉に倣って結婚したら新しい住居で暮らしたいと思っていたし、姉がコミュニティを出ていったことも影響しています。別のコミュニティに行ったとしても、もちろん両親や親族は大切なので時々は戻ります。”（子世代、妻の意見）

5. 4. 3 ワーキングスペース

4地域に共通するのは、男性はコミュニティ外で仕事をしているケースが多く、逆に女性は子育て、家事を行いながらコミュニティ内で仕事している。例えばサリサリストア^{注11)}は典型的な住居内部のワーキングスペースである。メインロードに沿って立地しており、コミュニティ内を実際に歩くと数多く見ることができる。

Daang Tubo の就業率は6割強であり、昼間にコミュニティ内に残っている人は多い。職種では、運転業^{注12)}、警備、電気メンテナンス、サリサリストア、行商など、日雇い労働で現金収入を得る家庭が多い^{文5)}。

CMP 地域ではコミュニティ内で美容院、裁縫業、電気屋、食堂、ピリヤード場など住居内にワーキングスペースを持つ事例が数多く存在する（写真5-2）。住居内でスペースが足りないときは、縦横に空間を拡張していく。



写真5-2 SAN AGUSUTIN-HOA のワーキングスペース
(2004年8月撮影)

5. 5 ケーススタディ

5. 5. 1 CASE 1: Daang Tubo における住居形態

祖母は、当時結婚していなかった父と二人で、1991年フィリピン北部のパンガシナン州（Province of Pangasinan）からメトロマニラに移住し、Daang Tubo に居住して13年目である。祖母、父、母、長男、長女の5人家族であり、母の妹の夫とその息子2人が住居建設の期間居候中である。計8人がひとつの住居で生活している。コミュニティ内に友人は多いが、住居内への訪問はほとんどない。（表5-1、表5-2、調査住居 No.14）

現在の家は1998年に建設し、最初は寝室・キッチン・居間のすべての機能はワンルームでまかなっていた。以下図5-5参照。

1) 子供の寝室確保

長女が生まれたときにベッドスペースの確保のため、平面方向に住居の拡張を行った。居間と寝室は半透明な間仕切り（カーテン）によって緩やかに仕切られている。寝室の周りには近隣の家と接近し非常に狭い。寝室内は窓がなく昼間でも暗く空気の流れない空間である。

2) サリサリストアの作成

父親はトライシクルドライバーであり、朝から仕事に出て夜遅くまで帰ってこない。ときどきお昼を家族全員で食べることもある。住居に残る祖母と母は現金収入を得るためにサリサリストアを経営している。コミュニティ内にサリサリストアは多いため、収入はそれほど期待できないが、家で家事をこなし、子育てをしながら仕事ができる点は祖母と母にとって大きなメリットである。道に面したサリサ

リストアを作成することで外の光が居間まで届き、室内に風が通るようになった。

3) リビング兼キッチン兼寝室

住居は、サリサリストア、リビング兼キッチン兼寝室、子供寝室の3つの空間に分けられる。リビングには窓はないが、台所の上にトップライトがあり、天井から光が入ってくる。リビングは祖母と両親2人の寝室となる。狭小空間が時間帯によってその機能を変えることで、生活機能を充足させている。

5. 5. 2 CASE 2: MACODA-HOA における住居形態

父、母はメトロマニラのパシッグ（Pasig）からMACODA-HOAへ移住して27年目である。父、母、長女夫婦、孫、次女、母の妹の計7人がひとつの住居で生活している。父は電気メンテナンスを仕事とし、平均月10000ペソと、コミュニティ内では安定した収入が得られている。（表5-1、表5-2、調査住居 No.9）

MACODA-HOAは、オンサイトのCMP地域である。再配分された土地には既存の住居があるため、計画通りに住居が建設されるまでには時間がかかる。以下図5-6参照。

1) 共有スペース

コミュニティは水はけが悪く、調査時は雨季のため道路が0.4m程浸水していた。階段で上り玄関がある。1階はリビング、キッチン、トイレがあり家族の共有スペースがまとめられている。1階はテーブル、椅子、コンボ、扇風機、テレビなどが置かれ、足の踏み場もない。中央のテーブルを囲み家族はここでコミュニケーションをとる。

2) 3つの個室

個室は2階にまとめられ、父と母、母の妹と次女、長女夫婦と孫で計3つの個室が作成されている。現在は母の妹が居候中であるために、次女と同室となっている。個人の所有物はすべて個室に置かれている。個々の個室は狭いためベッドスペースとして2階へ行く以外は、荷物置場としての意味合いが強い。

3) 生活機能の選択

ベッド生活により、ある一定のスペースが住居内に確保される必要がある。そのため狭小な住居の大部分はベッドによって占められ、共有スペースが圧縮される。そこで1階はリビングとしても利用されるが、家族はコミュニティ内のより広い空間に移動し（例えば、サリサリストア前、食堂、道路）コミュニケーションをとる。狭小な空間においてはベッドスペースといった最低限の生活機能が優先して割り当てられ、その他の生活機能が住居外のスペースに移動する。

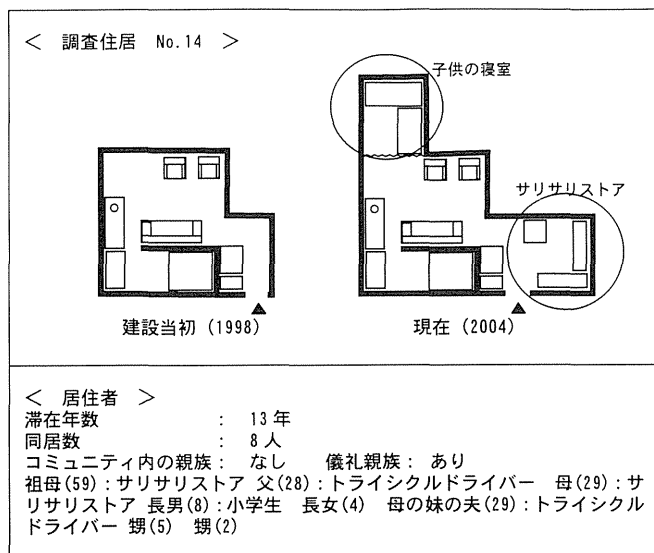


図 5-5 Daang Tubo における住居拡張例

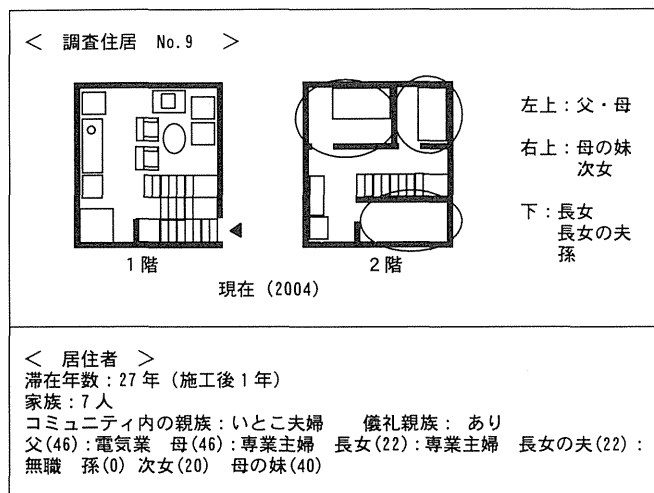


図 5-6 MACODA-HOA における住居拡張例

6. 考察

調査結果及びケーススタディから、調査地域で特徴的な住民同士の関係性と社会構造の変容について考察する。

6. 1 プライベートとパブリックの融合

生活領域の外部化は、狭小な住居からより広い空間で生活する上での工夫であり、ベッドスペースによって奪われた生活機能を確保するための手段である。一方で、生活領域の外部化に伴って、プライベートとパブリックな空間の境界があいまいになる。(図 6-1)

6. 1. 1 生活空間の半パブリック化

SAN AGUSTIN-HOA では食空間の外部化に伴い、料理を近隣の住民同士が持ちよって、食事を取る機会が増えた。食空間の外部化によって、プライベート空間は自然に住民が自由に入出入りする半パブリック空間となる。そして、リビングや食空間の外部化は、より密接な近隣関係を要求する。プライベート空間の外部化は、単に物理的な移動を意味す

るのではなく、近隣住民との新たなコミュニケーションの場を提供するのである。

6. 1. 2 パブリック空間のプライベート利用

CMP によって取得された道路は、コミュニティの共同所有である。道路はコミュニティ内で完結するため、利用するのは住民に限られる。そこで道路が本来もつ交通という機能を越えて、広場、食堂、移動式の店として利用される。また農地化することによってパブリック空間(道路)のプライベート利用が発生する。Daang Tubo においても教会の隣に空地があり、昼間はバスケットコート、日曜日には礼拝場、会議場などパブリック空間として利用される一方、隣地の住民はプライベート空間として利用している。

6. 2 新たなコミュニケーション空間の創出

ひとつの場所に対して一定の機能しか持たないような機能主義的な空間構成は現代の都市に特徴的であるし、また推進されてきた。しかし、調査地域ではひとつの空間を様々な用途に利用している。そのことによって、空間本来の機能をを超えて、本来意図していなかった新しいコミュニケーションが生まれる場となっている。(図 6-1)

例えば、4 地域に共通してコミュニティ内に多数のサリサリストアが見られる。サリサリストアの目的は商品販売であるが、道路に沿って多数存在するためそれぞれが十分な利益を上げることは期待できない。重要なのは、サリサリストアの前には住民が自然と集まり、重要なコミュニケーションの場としての意味を持つ点である。

“コミュニティ内の道路を入るとすぐにサリサリストアがある。別に買う用事なくても、いつも住民が集まってきて、いいコミュニケーションの場になっていますね。友人を連れてきていて、別のコミュニティの人とも知り合える。別にサリサリストアじゃなくてもいいのですが、そこは皆が集れる場所としてちょうどいい。”(SAN AGUSTIN-HOA の住民意見)

6. 3 空間機能の転用を可能にする原理

パブリック空間のプライベート利用など空間転用の際は、住民同士の間にはある一定の規律が存在している。そして、その規律を守ることがスムーズな人間関係を保つ秘訣となる。

SAN AGUSTIN-HOA では住民がコミュニティ内で住居を建設する際には、近隣の協力を求める。そして近隣住民は依頼者に対して労働力といったかたちでサービスの提供を行う。この時、依頼者は提供された労働力の返済にお金を渡すことはせず、返済が出来る機会を待つ。一方、近隣住民はいつか自分が建て増しの必要が生じたときに、必ず今日の借りを返すために手伝いに来てくれることを期待する。ここでは労働力というサービスの交換(レシプロシテ

イ^{注13)}において「等価の原則」が存在している。パブリックな空間を共用する際にも同一の関係原理が暗黙のうちに交わされている。

住民は狭小空間で居住していくために、生活機能をコミュニティ内で共同していくことが必要不可欠である。そして、お互いにお金を介在させずに良好な関係を保つため、ある一定の規則を持ちながら助け合って生活している姿が伺える。

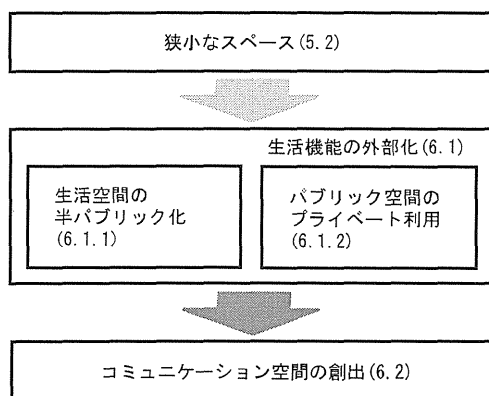


図 6-1 空間機能の変容プロセス

6. 4 都市型コミュニティ関係の萌芽

CMP で必要となる HOA は血縁関係を越え、住民の共同によって運営されている。HOA のリーダーは住民の投票で選出される。CMP の成功は HOA の適切な運営が鍵になっていることを住民は十分認識している。土地所有権の取得という共通目的によって住民同士は強い人間関係によって結ばれている。

核家族で生活して血縁関係者から経済的な援助を期待できない住民は、HOA の維持継続とそれに伴って期待できる利益を求め、血縁関係を越えた HOA という集団を選択したのである。それは言い換えれば、住民にとって新しい形態の家族である。個々の住居の大部分がベッドスペースしか持たず、リビング、食空間などプライベート空間は外部化し、コミュニティ内に離散する。そして、広場、道路などの共有空間はプライベート化する。コミュニティ全体でひとつの住居としての機能を充足している。(図 6-2)

6. 5 儀礼親族関係への回帰

その一方で CMP 地域では伝統的な儀礼親族制によって近隣関係の強化をはかっている。また、一時的に親族と同居している例も見られる。土地所有権を取得し定住する権利を得た住民は、生活が安定するに従い伝統的な人間関係へ回帰していくように思われる。

実際 SAN AGUSTIN-HOA において、住民は直接的・間接的にコミュニティリーダーと儀礼親族関係を結んでいた。設立段階では土地所有という共通目的によって血縁関係を超えて結成された HOA は、儀礼親族という伝統的な関係性を包

含することになった。(図 6-2)

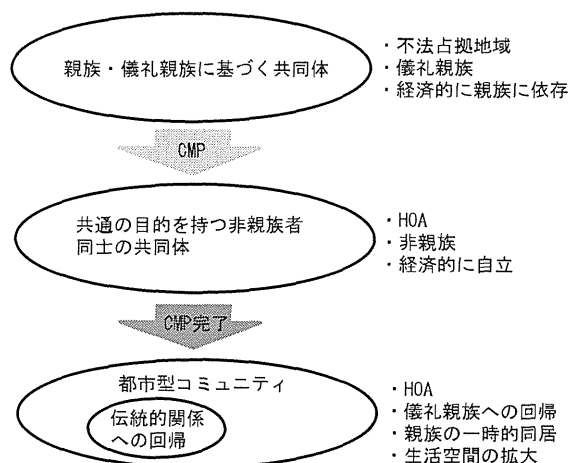


図 6-2 コミュニティの変遷

7. まとめ

本研究では住居内部の実態調査から、狭小な生活空間への対応とその結果生まれる空間の特性について述べ、居住者の構成や時代の推移によるニーズの変化に対して柔軟な居住形態を調査した。特筆すべき点は、フィリピン社会で特徴的な大家族の存在や儀礼親族の重要性はコミュニティ内に認められる一方で、核家族を中心とする家族構成と生活機能をコミュニティ全体へ依存せざるを得ない生活実態である。ここには、フィリピン都市型ともいえるべき新しい社会構造の萌芽の現象がみられる。

8. 展望

核家族が多数という理由で、短絡的に核家族をユニットとして住居を計画することは、住民生活に必ずしも合致するとはいえない。狭小空間での居住を可能にするために、貧困地域の開発計画は住民が共有する共同体の概念を十分に考慮した形で提供されなければならないことは明らかである。本研究で得られた結果を、実際の建築計画やコミュニティ計画へ応用する技術的側面は今後の課題である。

<注>

- 1) 不法占拠者は、近年 “informal settler” 又は “informal settlement” と表現されている場合が多く、“squatter” は使用されない。
- 2) UDHA は都市住宅開発の基本法として 1992 年に施行され、Section 8 で CMP が法定化されている。1995 年 National Home Mortgage Finance Corporation により実施のためのガイドラインが規定され、1996 年 NHMFC の承認を受けた(参考文献 2)。
- 3) ラテンアメリカ・アジア住居奉仕団 (SELAVIP) の会報誌 “SELAVIP NEWSLETTER” には CMP のみならず住宅改善に取り組む住民組織、NGO のプロジェクト事例が多数報告されている。また、IPC (institution of philippine culture, Ateneo de Manila University) など大学・政

府研究機関からも多数の報告がなされている。

- 4) FDUP (Foundation for the Development of Urban Poor, Inc) は NHMFC により 1988 年に認定された最初 CMP Originator である。Originator のパイオニアとしての役割担い, CMP で最大の実績を有する。
- 5) フィリピン大学デリマン校内には 51.5 ヘクタールの敷地を不法占拠し, 19 のコミュニティ計 19234 世帯が生活している。2003 年 1 月フィリピン大学とケソン市でデリマンキャンパス内不法占拠地域のオンサイト改善事業について事業推進が確認された。今回調査対象とした Daang Tubo Community は UPA, TAO-Pilipinas, Inc. により 2004 年 5 月, オンサイトプロジェクト案が提案されている。
- 6) UPA (Urban Poor Associates) はデニス・マーフィー氏 (Denis Murphy) により都市貧困者を支援する NGO として 1991 年設立された。デニスは 70 年代のトンド臨海地区開発に対して ZOTO (Zone One Tondo Organization) の組織化に係わるなど不法占拠地域の土地・家屋の質的向上, 住民の組織化における第一人者である。
- 7) TAO-Pilipinas, Inc. は技術部門に特化した NGO 組織である。代表のアイリーン・ルステリオ氏 (Arlene Lusterio) は今回の調査に協力して頂いた。専門領域は, 建築, コミュニティ計画, 環境開発であり, 社会経済分野の NGO と共に多くの貧困地域開発に関わっている。
- 8) 拡大家族 (extended family) は核家族 (nuclear family) 「1 人の父親と 1 人の母親とその子供達」で構成される家族が拡大・複合したものと定義される。
- 9) コンパドラスゴ制 (compadrazgo system) と呼ばれる儀礼による親族関係が存在する。本来カトリックにおける儀礼親族関係は洗礼時における受洗者と名親の間, 受洗者と洗礼を受ける者の間の霊的血縁関係のことをいう。しかしフィリピンにおいて実際に最も重要な関係は名親と実父の関係である。
- 10) コンパドレ (compadre)・コンマドレ (commadre) は名親 (教父母) のことでありタガログ語でニノン (男の名親; ninong), ニナン (女の名親; ninang) と言う。コンパドレ・コンマドレは受洗者 (イナアナック: inaanak) に対して親族と変わらぬ権利と責任を持つ。
- 11) サリサリストアは貧困地域で良く見られる小規模の小売店である。お菓子, 飲物, 洗剤, トイレトペーパー, 歯ブラシなど主に生活雑貨を販売する。
- 12) 運転業はトライシクル (tricycle) 又はジブニー (Jeepny) である。ジブニーは 1 回乗車で 7.5peso, トライシクルは同距離で 20peso 程度である。
- 13) レシプロシティ (Reciprocity) は互酬性, 相互主義, 交換などと訳されるが, 本来の意味を損なわないように, 本論文ではそのまま使うこととした。フィリピン社会には契約的レシプロシティ, 準契約的レシプロシティ, ウタン・ナ・ロオブ (utang na loob) の 3 種類があるといわれる。

<参考文献>

- 1) De Soto, Hernando : *The Mystery of Capital -Why Capitalism Triumphs in the West and Fails Everywhere Else-*, Basic Books, 2000
- 2) National Home Mortgage Finance Corporation : NHMFC Corporate Circular 010 Consolidated Implementing Guidelines for the Community Mortgage Program, *Socialized Housing in the Philippines : A Compilation of Housing Laws and Other Reference Materials, Volume II*, pp.55~85, Partnership of Philippine Support Service Agencies, Inc. (PHILSSA), 1998
- 3) Racelis, Mary : Tagalog Social Organization, *Brown Heritage: Essay on Philippine Cultural Tradition and Literature*, pp.134~148, Ateneo de Manila University

Press, 1967

- 4) Urban Poor Associates (UPA) : *Community and Household Profile of U.P. Pook Daang Tubo*, pp.18~19, UPA, 2004
- 5) 同上, pp.39~40
- 6) 同上, pp.12~13
- Racelis, Mary : Begging, Requesting, Demanding, Negotiating: Moving toward Urban Poor Partnership in Governance, *Urban Futures; Economic Growth and Poverty Reduction*, Intermediate Technology Group, 2005
- Veneracion, Cynthia C. : *Partnerships for Slum Improvement: The ADB-JFPR and DSWD Projects in Muntinlupa City and Payatas, Quezon City*, Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University, 2004
- Racelis, Mary : Community Empowerment, People's Organizations, and the Urban Poor, *Struggling for Shelter, Infrastructure, Services, and Dignity in the Philippines, Southeast Asia Urban Environments: Structured and Spontaneous*, pp.3~27, Arizona State University, 2000
- United States Agency for International Development (USAID) : *Building Houses for the Poor; A Source Book on Low-Income Housing Program, Strategies, Technologies and Designs*, the Small Enterprises Research and Development (SEFDEF), 1992

<謝辞>

本研究の調査にあたっては, FDUP (Foundation for the Development of the Urban Poor), UPA (Urban Poor Associates), TAO-Pilipinas, Inc. の皆様に多大なご協力をいただきました。記して謝意を表します。

Ms. Ana Oliveros	FDUP
Ms. Arlene Lusterio	TAO-Pilipinas, Inc.
Ms. Bench Gegrinos	UPA
Mr. Jason Miranda	FDUP
Ms. Praxie Surquia	FDUP

またインタビュー及び実測調査にご協力いただいた SAN AGUSTIN-HOA, MACODA-HOA, SAMARIMA-HOA, Daang Tubo の住民の皆様に厚く御礼申し上げます。

研究のまとめにあたって, IPC (Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University) の Dr. Mary Racelis 氏, 関谷雄一青山学院女子短期大学専任講師には多くの助言をいただきました。